

アメリカ資本

サンタ・アナから始まり、コモンフォルト、フアレス、そして前任者のレルドに至る過去の大統領は、数多くの鉄道建設許可を出したにもかかわらず、資本不足と輸入機材や技術が高額であったため殆ど建設は進まず、敷設された線路の長さは1867年の50キロから1876年の666キロに伸びただけであった。ディアス政府は鉄道に将来の発展を期待した。ディアスが特権を与えたアメリカの実業家は、J.P.モーガン、ロックフェラー、グッゲンハイム、ダッジ、ハンティントン、ヘンリー・ピアース、E.J.ハリマン、ジェイ・グールド、ラッセル・セージであった。主要幹線はテウァンテペック地峡横断鉄道、米墨国境五都市とメキシコ内部を結ぶ線、首都とベラクルースやガルフ沿岸を結ぶ二本の線、コリマ、グアダハラと太平洋岸を結ぶ線であった。1902年、メキシコ鉄道株の80パーセントはアメリカ資本に握られていた。その額約三億五千万ドルは米国の対メキシコ投資額全体の約70%を占めていた。以前カリフォルニアでハンティントンの会社に雇われていた財務長官リマントゥールは、アメリカの独占状態から脱却するため、1902から08年にかけて、鉄道株の買収計画を進めた結果、主要路線の買収に成功して、メキシコ国有鉄道として主導権を握った。³²

アメリカ資本がメキシカン・セントラル鉄道を完成させた1884年、ディアス政府は、地下資源は全て国家が所有するという法律を無効にした。それ以前は輸送手段が無かった事と、法的な所有権が曖昧であったため、米国をはじめ外国の投資家は敬遠していた。1884年、アメリカ企業が所有する鉱山採掘権は僅か40であったものが、1904年には一万三千余となり、これによって譲渡された土地は22万ヘクタール以上にも達した。全部で31の鉱山会社が運営していたが、その内の17社が米国企業で、投資額の81%を占め、英国企業は10社、資本は14.5%、メキシコ企業はほんの僅かであった。アメリカ最大の企業はグッゲンハイム ASARCO の一億ペソ、アナコンダは六千万ペソ、グリーン・カナネア・コンソリデーテッド・カパー・カンパニー、フェルプス・ダッジの所有するモクテズマ・カパー・カンパニーなどである。

銀の生産高がディアス政府の経済を左右した。1870年代の年間生産高は2650万ペソ、1905年がピークで8千万ペソ強であった。銅の生産は1890年の五千六百トンから1910年には四万八千トン強であった。1905年、銀の価格が下落するのに伴い、銅其の他の非鉄金属や石炭も停滞した。鉱業生産の不振に伴い、失業者が増大し、それに加えて閉山したコロラドの銀鉱から多くの失業者がチワワに戻り、ディアス政権の最後の数年間、メキシコ北部の鉱山地帯の社会情勢は悪化の一途を辿った。³³

1876年、ボストンの投資家がベラクルース州トゥspanで最初の石油試掘を行ったのを始め、カリフォルニアやイギリスの企業も参入して失敗を重ねた。1900年アメリカの石油関係者が本格的にメキシコに興味を持ち、メキシカン・セントラル鉄道の社長ロ

パートソンを中心にメキシカン石油会社を創設した。1901年5月14日、タンピコから西六十キロほどの内陸エバノでアメリカの油井が噴出し、これまで成功していない会社にも大量の資金が注入された。1910年までには二百九十にのぼる外国企業がメキシコで活動を行っていた。その中でもスタンダード石油は重要な地位を占めていた。

石油生産の拡大による政府の収入が増えたにも拘らず、石油産業の成功は社会的にも政治的にも、メキシコに何の利益ももたらさなかった。この自国の中の外国からの収入のため、農業や製造業の改革がなおざりにされ、これ等の重要な分野は政府を支える力にはなれなかった。メキシコは原油を輸出し、国内で消費する石油製品の殆どを輸入した。経済発展は石油を生産している地域に限られ、周辺の住民は追い出され貧困に苦しんだ。石油生産地域は資本集約型の隔絶された経済で、その周辺一帯はインフレに悩まされた。石油会社は外国人技術者や現場監督を高給で雇い、国内労働者はインフレの続く中、低賃金で働かされた。メキシコの資本家たちは、やる気はあったものの、対抗できるだけの資本や技術が無く、政府に圧力を掛けるしか術はなかった。財源を満たしてくれてはいたが、遠慮会釈無く要求を出すアメリカの石油会社に対して、ディアスは嫌悪感を抱いていた。メキシコの石油生産量は大きかったが、社会的、経済的、政治的不安要因となった。そして、強力なアメリカ市民は間断なくメキシコ政府に対し圧力を加えた。どんどん拡大を続ける鉱業や石油の少数グループはディアスの経済政策を益々複雑にしていった。³⁴

ディアスが行った公有地を私有地化する処置は資本主義経済を達成する過程では避けられない事であった。1870年代の後半から90年代にかけて、小作人は殆どの土地を失い、アシエンダで雇われ、輸出用作物の栽培と、それに関連した仕事に追いやられていった。約一億三千万エーカー、実に国土の27%もの土地は、このようにしてアメリカ人が所有するようになった。1910年までには一万五千人のアメリカ人がチアパス、オアハカ、ベラクルース、タマウリパス、サン・ルイス・ポトシ、ハリスコ、シナロア、ドゥランゴ、ソノラ、チワワ、コアウイラ、バハ・カリフォルニアの各州に入植していた。アメリカ人は土地の権利証書を振りかざして違法居住者を追い出し、有刺鉄線で囲い、以前そこに住んでいた住民を雇って必要な労力を確保した。アメリカの大規模な農業法人は、借地農家と解約して綿花、ヘニケン、イストレ、グワユール、コーヒー、カカオ、チクル、ゴムの樹など輸出作物を栽培した。メキシコの農民が放逐された事により全国のあちこちで暴動が発生し、死傷者が出た。アメリカ人が所有地を広げた結果、土地の値段は五倍にも達し、メキシコの弱い通貨では土地を購入し、農業を手がける事は不可能となっていった。

最大の土地所有者は、サンフランシスコ・クロニクル紙の発行者、日本人排斥の急先鋒であったウィリアム・ランドーフ・ハーストで、所有した土地は実に六百六十万から七百萬エーカー、所有地はチワワ、オアハカ、タバスコ、チアパス、カンペチェの各州に分散していた。50万エーカー以上の所有者は25社、十万から五十万エーカーは百社以上

あった。ディアス時代、外国市場はメキシコの農業に重大な影響を及ぼすようになった。1907年以降、粗糖の生産地帯であったモレロス州からベラクルースと、絶えず旱魃に悩まされている北寄りの中央部は絶望的な状態に置かれていた。また、外国資本による輸出主体の農業が行われていた北部では、土地の有力者たちは破産寸前であった。1910年、農業人口の90%は土地を失い、見放された百姓や貧しい労働者に飢饉が忍び寄っていた。³⁵

32. John Mason Hart, "Revolutionary Mexico, The Coming and Process of the Mexican Revolution, 10th Edition", University of California Press Berkeley, 1989, P131
33. Ibid. P141
34. Ibid. P145
35. Ibid. P157

[目次へ戻る](#)